

八 でっかい夢で 百年後を予見した

まんじゅう屋の少年 科学者 志田林三郎 (一八五五—一八九二)

ロンドンの北北西四百キロ、そこにグラスゴーという工業都市があります。十九世紀後半には、最も進んだ技術をもつ造船業などで、大変活気のある都市でした。その中心になっていたのが、当時世界の科学技術研究の最先端を進んでいたグラスゴー大学でした。そこでは、イギリス国内だけでなく、外国からも多くの留学生が集まって勉学にはげんでいました。志田林三郎もその一人でした。

林三郎は、今、手のひらの金色に輝くメダルを、じっと見つめながら、からだはいっしかはるかかなたの故国日本、そして郷土多久の方をむいていました。そのメダルは、クレランド賞クレランド賞といい、年に一回、大学から最優秀研究論文最優秀研究論文にあたえられるものです。林三郎は、帯磁率帯磁率に関する研究でこのすてきなメダルをもらったのです。明治十四年(一八八一)のことです。

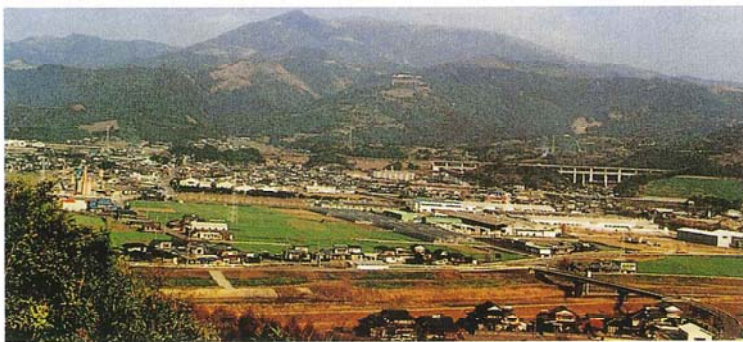
林三郎の心に、一年前に横浜から船出した時の光景光景、そして、お母さんの顔、幼い時から今日までのことが、次々にうかんできました。

林三郎は、安政二年(一八五五)、現在の多久市東多久町別府別府で生まれました。鎖国鎖国をしていた江戸時代江戸時代でしたが、その二年前、アメリカ合衆国のペリー提

督^{とく}が四^よそこの軍艦^{ぐんかん}を率^{ひき}いて開国^{くわいこく}を求めて浦賀^{うらが}にやってきました。突然^{とつぜん}現れた軍艦^{ぐんかん}にその時の人々のおどろきは、大変^{たいへん}なものでした。それは、今日^{けふ}のようにすぐれた伝^{でん}達^{たつ}の方法^{ほうほう}がなかったために真実^{まこと}を理解^{りかい}することができなかつたからです。そのような時代に、林三郎は生まれたのでした。

林三郎が生まれると、五か月もしないでお父さんがなくなりました。そこで、家計が大変苦しくなり、お母さんは、まんじゅうを作^{つく}って売^うり、生活^{せいかつ}を支^{ささ}えました。物心^{ぶつしん}がつくようになると林三郎はその手助け^{てすけ}をしました。そのころ、牛津川^{うしづ}には、舟^{ふな}が行き来^{いらい}をしていました。林三郎の家から一キロほどの舟津^{ふなつ}に舟つき場^{ふなつきば}がありました。そこにも親子^{おやこ}でまんじゅうを売^うりによくでかけ、人気者^{にんき}になっていました。ある日^{あるひ}、そこで働^{はたら}く人^{ひと}たちが、かしこいというわさの高い林三郎の暗算^{あんざん}力をためてみようと、大勢^{おおぜい}で一度^{いちど}にそれぞれたくさんのまんじゅうを手^てにして、代金^{だいぎん}がいくらになるかを問^とうたところ、そくぎに答^{こた}えてみんなをびつくりさせたそうです。近く^{ちかく}に住^すむ大庄屋^{おおぢや}木下平九郎^{きのしたへいくろう}や漢方^{かんぽう}医^い尾形^{おがた}惟高^{これたか}は、林三郎のすぐれた才能^{さいのう}を知^しり、それを伸^のばすように援助^{えんじょ}しました。

林三郎は、うわさを聞いた多久^{たか}邑^{ゆうしゆ}主^{ぬし}から呼^よび出^だされ、平方^{へいほう}根^{こん}や立方^{りつほう}根^{こん}のむずかしい問題をだされましたが、そくぎにときました。感心^{かんしん}した多久^{たか}邑^{ゆうしゆ}主^{ぬし}は、林三郎の将来^{しょうらい}に期待^{きたい}しました。そして、林三郎は邑校^{ゆうこう}東原^{とうげん}席^{せき}舎^{しゃ}に入り勉強^{べんきやう}することになりました。



林三郎が少年時代を過ごした東多久町(手前に流れる川が牛津川、前方の山が天山)



林三郎生誕の地(多久市東多久町別府)



「ひたむきに母を思い、故郷を思う」
林三郎自筆の漢詩(左は孫の志田林太郎氏)

林三郎のすぐれた勉学ぶりは、佐賀藩主の耳にもはいり、佐賀藩の学校に進学することになりました。さらに藩の費用で東京工學寮(後の工部大学校、今の東京大学工学部)に入学し電信学を修めました。明治十二年工部大学を卒業すると間もなく、イギリスのグラスゴー大学に留学を命ぜられたのです。

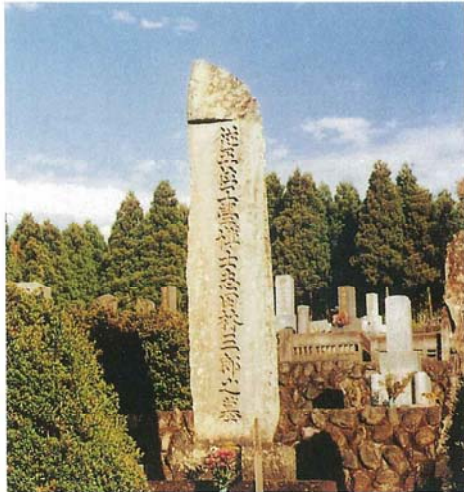
異郷のこの大学でも、当時、世界一流の物理学者ケルビン卿について勉学にはげみ、この金メダルを受賞したのでした。そのほかにも高等数学、高等理科で一等賞をもらうなど、すぐれた成績は現地の新聞でもすばらしいニュースとして紹介されました。

林三郎は、いま、手のひらのメダルのずしりとする重さと喜び・感激のなかで、自分をささえ、才能をみだし、はげまし、みがいてくれた多くの人たちのことが、急に、なつかしく思い出されました。

林三郎は、明治十六年四月、日本に帰り、工部大学校教授として学生の指導と研究にあたりました。一方、電信局次長にもなり、電信電話事業の発展のため、いそがしい毎日を送りました。

その間に、自記電流計の機械を発明しました。また、墨田川で導電式無線電信の実験もしました。マルコニーの大西洋横断無線電信の成功より九年も前のことです。

林三郎は、これから先の世の中で大切なのは、いろいろなことを速



日本最初の工学博士志田林三郎
の大きな墓(多久市東多久町宝蔵寺)

く正確せいかくに伝えることだと考えました。まるで、今日のような高度情報社会じょうほうがやってくることを見通していたかのようです。

そこで、林三郎は電気工学の研究や事業に努力どりよくし、その基礎きそをきずきましたので、日本の電気工学の祖そとも呼ばれています。また、日本最初の工学博士はくしでもあります。

明治二十一年(一八八八)六月に、林三郎が中心になって電気学会がつくられました。電気工学を発展はってんさせ、科学技術の進歩で国を栄えさかさせ、人類じんるいを幸福にしたいと願ねがってつくられたのです。電話がやつと使われ始め、まだ、電波という言葉さえないころのことです。林三郎は演説えんぜつのなかで、今日のことばで言えば、「無線電信、ラジオ、テレビ、電気自動車、テープレコーダー、データ通信、

光通信などを使う時代がくる」とのべています。百年後の今の世の中をみごとに予見していたのです。

たいへんおいしいことに、林三郎は三十六歳の若さでなくなりました。まだまだ、大きな夢に挑戦ちようせんしたかったと思います。

それを、きつと、皆さんに期待していることでしょう。未来をになう皆さん、でっかい夢にアタックしてみましよう。

林三郎が百年前に予見していたもの

